
とある悪魔の絶対能力（パーフェクトスキル）～外伝～

ぱっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある悪魔の絶対能力パーフェクトスキルと外伝

【Nコード】

N8302L

【作者名】

ぱつつあん

【あらすじ】

とある少年が闇に落ちてから数ヶ月が経ったある日『上』から命令が下った。それは『時間移動タイムトリップ』と言う能力を持った少女を捕まえることだった。しかしとある少年一虎王龍牙はその少女の能力によって過去にとばされてしまった。そしてたどり着いたのが『雛見沢』と言う村だった。とある悪魔

が雛見沢に関わる時惨劇を回避できるのか？

千年の旅を終わらせるため悪魔が歯車を回し始める。
これは龍牙の空

白の二年の話です。

追跡（前書き）

これは『とある悪魔が絶対能力者』の外伝です。

さあ惨劇の始まりです…

追跡

とある少年が光から闇に墜ちてから数ヶ月が経とうとしていた。

今とある少年は『グループ』と言う最下層の闇の組織に所属している。

『グループ』の主な仕事は『上』から出された仕事をこなすことだ。その仕事とは実験を潰したり時には人間を殺したりする事もあるくそつたれな事だった。

しかしそんな仕事でも『グループ』のメンバーはこなすしかない。

何故ならそれぞれ大切な何かを抱えているからだ。

そしてとある少年一虎王龍牙もその一人だ。

「こちら虎王。ターゲットを追跡中。そっちは？」

「こちら土御門。ターゲットを追い込む。そこで確保してくれ。抵抗するようなら殺しても構わない」

短いやりとりをした後通信が途切れた。

ここは夜の学園都市の誰も近寄らない深い闇に覆われた裏地だ。

今『グループ』はとある能力者を追っている。

その能力者と言うのは時間の流れを操る能力者らしい。

名前は「柵覇桜」^{さくは}と言う少女だ。

能力名は「時間移動」^{タイムトリップ}と言う能力だ。

しかし彼女はLEVEL4のため他人を他の時間に飛ばせても自分を他の時間に飛ばせないため走って逃げるしかないのだ。

何故『上』がこの少女を狙うかは分からないが『グループ』にとっては関係のない話だった。

龍牙にとって人殺しを行うのは初めての事のためためらいがあった。

それに元々龍牙は人殺しをするような性格ではない。

むしろそれを嫌うタイプだった。

（やるしかないのか…）

少女を殺すことに対して覚悟が出来ないまま少女を追跡していた。

すると近くで巨大な爆発が起こった。

龍牙は走るスピードを上げて爆発した場所に向かった。

爆発した場所につくとそこには学園都市最強の能力者、^{アクセラレータ}一方通行が現代的な杖をつきながら立っていた。

その先にはターゲットの少女が倒れていた。

「さっさと死ンでくンねェか？」

一方通行は少女に向かって石を蹴りつけた。

その石はとんでもないスピードで少女に飛んでいく。

一方通行の能力は「ベクトル操作」だ。

それによって蹴った石のベクトルを変更したのだ。

だがベクトル操作された石は少女に当たる前に消えた。

どうやら能力を使い別の時間に石を飛ばしたようだ。

そして再び逃走を始めた。

「チツめんどくせェ…」

一方通行は首の電極のスイッチを能力者モードから通常モードに切り替えた。

「オマエあいつを追え」

一方通行はめんどくさそうに龍牙に告げた。

龍牙はうなづくこともなく少女を追いかけた。

少女を追いかけてからすでに一時間も経っていた。

『グループ』に対して能力も使わずにここまで逃げ切るのは最早誉めるべき事だった。

複雑な道を走り少女を見失わないように走りつづけた。

そして道を曲がったとき少女は立ち止まった。

どうやら行き止まりのようだった。

少女は恐怖の顔をしたまま龍牙に向き直った。

「やめて…こないで…」

少女は後ろの壁に寄りかかり龍牙に告げた。

「黙って俺達と来てくれないか？」

龍牙は極めて優しい口調で聞いた。

しかしその優しさも少女には偽りのものにしか見えていないだろう。

「嫌よ…あなた達と一緒にいったら…殺される!!」

その少女の叫びに龍牙の胸がチクリと痛んだ。

そして仕方ないとばかりに腰の剣を抜いた。

「殺しはしない…」

そう言って龍牙は剣を構えて少女に突っ込んだ。

「やだこないで!!」

少女は龍牙に向かって右手を突きつけた。

すると龍牙の周りの空間が歪み始めた。

そしてその空間に龍牙の体は吞まれた。

(何だ!? これ!?)

その空間は無重力で足場のないまるで四次元のような空間だった。

すでもといた景色はなく四次元の空間が広がっていた。

そしてこれは少女の能力によって別の時間にとばされたと理解した。

(チッ、厄介な事になった…)

龍牙は心の中で考えていた。

そしてついに四次元の空間から龍牙はとある時間についた。

ここから龍牙の物語の外伝が始まる。

この時間の中で出会う仲間達と龍牙はどのような事を学ぶのか。

そしてこの時間でおこる惨劇を回避できるのか。

それは龍牙に全てがかかっていた。

それでは始めよう…

惨劇の起こる村…

雛見沢村へようこそ…

とある悪魔が絶対能力者く外伝く

スタート…

追跡（後書き）

感想待ってます♪

始まり（前書き）

惨劇の始まりです…

始まり

四次元の空間が開けて龍牙が見たものは驚くものだった。

科学や魔術などが完全に有り得ない自然が豊富な田舎だった。

「一体いつにとばされたんだ？」

龍牙は道の真ん中で眩いていた。

とりあえず戻る方法の前にこの時間について情報を集めることにした。

しかし周りにはコンビニどころか人一人いない。

仕方なく龍牙は適当にぶらつくことにした。

「まったく何なんだここは…」

悪態をつきながらも歩く龍牙はとある事に気づいた。

腰にたずさえていた龍牙の愛剣が無くなっていたのだ。

「どこ行っただんだ!？」

龍牙は急いで今来た道のりを戻った。

しかし龍牙の剣は落ちていなかった。

それでも龍牙は走りつづけた。

そしてゴミの山が積もっている人気の無いところに来ていた。

「ここにあるのかもしれない」

根拠の無いことだったが龍牙はゴミ山に向かった。

ゴミ山を掘ったりどかしたりして必死に剣を探した。

しかし剣は全く見つかる気配がない。

「畜生：別の時間に飛ばされた挙げ句剣まで消えるなんて…」

龍牙は近くにあつた壊れたソファに腰掛けてうなだれていた。

そしてすでに半ばやけくそ気味になっていた。

もう帰れないのではないか、剣はなくなったのでしまったのではないかなどのマイナス思考が龍牙の頭の中を駆け巡っていた。

そして視点を変えると龍牙の目にとある新聞が目に入った。

「新聞か…」

龍牙はゆっくりとした動作で新聞を拾った。

そして中を開いた。

まだ余りボロボロになっていないことから最近のものと龍牙は判断

した。

「昭和58年3月か…ずいぶん昔にとばされたもんだ…」

龍牙が今いる時間は龍牙のいた時間からかなり離れていた。

龍牙は深いため息をつき新聞を放り投げた。

そしてソファに全ての体重を預けて目を閉じた。

(ここで…暮らすのか…)

すでに龍牙は元の時間に戻ることを半ば諦めていた。

すると近くで何かがなる音がした。

「誰だ!？」

龍牙は学園都市のいたときの癖でとっさに音のした方から距離を置き戦闘体勢をとっていた。

しかし龍牙が見た先には一人の少女がいた。

その少女は驚いた表情で龍牙の事を見ていた。

「ご、ごめんね。驚かせる気はなかったの」

その少女は手をわたわたと振り龍牙に言った。

どうやらこの時間の住人らしい。

「こちらこそ悪かった。君は誰なんだ？」

龍牙は戦闘体勢を解いて少女に聞いた。

この少女は龍牙と同じか年上くらいの感じがした。

「私は竜宮レナだよ？あなたは？」

「俺は虎王龍牙だ」

竜宮レナと名乗った少女は龍牙の名前を聞いて何かを思い出したような顔になった。

「もしかしてあなたが転校生の！？」

龍牙は転校生と言う言葉に不審を抱いた。

ついさっきこの時間に飛ばされた龍牙が何故転校生として竜宮レナに知られているのかと。

「あれ違うのかな？かな？」

レナは首を傾げて龍牙に聞いてきた。

だが龍牙に分かるはずもなかったのでとりあえず話を合わせた。

「大丈夫。合ってるよ。レナさん」

龍牙はとりあえず愛想笑いを浮かべて言った。

「レナさんじゃなくてレナでいいよ。龍牙くん」

レナは初対面の龍牙に呼び捨てにしろと言ってきた。

「そうですか。よろしくレナ」

「ところで龍牙くんはどうしてここにいたのかな？ かな？」

核心をつかれ龍牙はドキッとしたが本当の事をばらすわけにはいかなかった。

「ちょっと掘り出し物がないかなって」

「レナと一緒にだね！」

どうやらレナはここで何か掘り出し物を探しているらしい。

龍牙は剣だが先に見つけられては後々めんどろな事になると思った。

「今日はもう帰りますね？」

「じゃあ私も」

レナは龍牙の後についてきた。

そこで龍牙は思った。

レナと言う少女と出会ってからこの時間の事やこの村についての知識が何故か分かるようになっていた。

（どうやらこの村の奴らと関わると何かが分かるらしいな…）

「どうしたの？そんなに恐い顔して？」

レナに言われて龍牙ははっとした。

どうやら顔に出ていたらしい。

「何でもないよ。じゃあまたな」

「うんまた明日ね！！」

龍牙はさりげなく転校生として学校に行く日を聞いていた。

どうやら明日龍牙は転校生として学校に行くらしい。

（明日か…）

龍牙が元の時代に戻るためにはとりあえず学校に行くしかなかった。

そして記憶に入ってきた龍牙の家に向かった。

龍牙は自分の家につくなりげんなりした。

かなり使い込まれボロボロの家だった。

地震がきたらおそらくこの家は崩壊するだろう。

「まあ元の時代に戻るための辛抱だな…」

ため息をつきながらも龍牙はボロボロの家に入っていった。

始まり（後書き）

感想待ってます♪

転校初日（前書き）

惨劇の始まりです…

転校初日

龍牙はいまとある学校の前にいる。

とある学校とは雛見沢分校の事だ。

どうやら人が少なく全学年で一クラスしかないらしい。

「龍牙くんこっちよ」

ここの分校の教師のちえ先生に連れられては分校の中に入った。

中は見かけと同じでボロボロだった。

（こんなところで授業すんのか？）

そんな事を考えていると教室の前についた。

そこで龍牙はあきれていた。

教室の扉の上の部分に黒板消しがセットされていた。

さらに足元には細いワイヤーのようなものがあった。

それに引っかかると何かが起こる仕組みになっているのだろう。

しかしそれに先生は全く気づいている様子はなかったのでとりあえず救いの手を差し伸べることにした。

「先生、俺先に入ります」

「ちよっ」

先生の言葉を聞かずに龍牙は教室の扉を開いた。

とりあえず落ちてきた黒板消しを教室の端まで蹴り飛ばした。

その後わざと足元のワイヤーに引っかかった。

すると大量の雑巾が龍牙めがけて飛んできた。

それを全てかわしたと思ったら今度は再び上から盥が落ちてきた。

龍牙は盥を軽々と避けるとセットされていた罠は全て終わっただけだ。
いい。

「ま、まさかわたくしのトラップが…」

カチューシャをつけた小学生くらいの少女が驚愕していた。

どうやら小学生くらいの少女がこれを仕掛けたらしい。

それに何故かその近くにいるポニーテールの中学生くらいの少女と罠を仕掛けた少女が感心した顔で龍牙を見ていた。

「誰ですか？こんな事をやったのは？」

先生が入ってきていきなり怒り出した。

それもそうだろう。

龍牙でなければ大惨事になっていたことは目に見えていた。

「わたくしですわ…」

「北条さんまたなの？」

先生はあきれたとばかりに言った。

「まあまあそんなに怒らずに。さっさと自己紹介したいんですが？」

龍牙はあきれていた先生に言った。

「そうですね。みなさん今日から一緒に勉強することになった虎王龍牙くんです」

先生が龍牙の事を説明した。

そして休み時間になるなり龍牙の席の周りにクラスのみんなが集まってきた。

その中にはレナの姿もあった。

「私はこのクラスの学級委員長の園崎魅音。よろしく」

ポニーテールの巨乳の少女に言われた。

「僕は古手梨花なのですよ、にぱー☆」

笑顔が素敵な髪が長い少女に言われた。

梨花を見たとき龍牙はザワっとしたものを感じた。

「わたくしは―」

「トラップ女だろ？」

「なっ！？わたくしには北条沙都子ですわ！！！」

なんとなく黒子と話し方が似ているのが沙都子だった。

「早速だけど質問タイム！！」

魅音がいきなり叫んだ。

するといろんな質問が行き交った。

「龍牙はなんか武術やってたの？さっきの動きはただ者じゃないね？」

魅音が何やらニヤニヤしながら聞いてきた。

よく見てるなと思いつながら龍牙は答えた。

「剣術をちょっとな」

すると周りから歓声が上がった。

どうやらかなりの好感触だった。

「さすがわたくしのトラップを回避しただけのことはありますわね」

沙都子は何やら悔しそうに龍牙に言った。

よほどトラップを回避されたのが悔しかったのだろう。

「かわいそかわいそなのです」

梨花が沙都子の頭をなでていた。

「仲がいいんだな」

「僕と沙都子是一緒に住んでるからなのですよ。にぱー☆」

龍牙は何気に感心してしまった。

その後も転校生恒例の質問地獄にあった。

――放課後――

授業が終わったのでさっさと無くしてしまった剣を探しに行こうと荷物をまとめていた。

最初からあまり荷物がなかったため時間はかからなかった。

荷物をまとめ終えて教室をでようとした。

「龍牙、ちょっと待って」

魅音に呼び止められ振り向いた。

「なんだ？」

「部活のメンバーに入らない？」

魅音のいきなりの誘いに戸惑ってしまった。

確かにこの時間でたくさんの人と関われば情報を得ることが出来る。

しかし剣がないのも心許なかった。

「嫌かな？」

魅音が上目遣いで聞いてきた。

その目に龍牙はため息をついてしまった。

「分かったよ：具体的には何するんだ？」

「んゝランプとか色々やるよ」

要するに遊ぶための部活のようだった。

メンバーはレナと沙都子と梨花それに魅音の四人だった。

机を合わせてテーブル状にした。

「今日は何するのかな？ かな？」

「みい、負けないですよ！」

「わたくしもですわ」

何やら気合いが入っていた。

「んーじゃあ入部テストって事でじじぬきにしよう」

「ちょっと待て、なんでテスト？」

「細かいことは気にしない」

魅音が笑いながら龍牙に言った。

はめられたと思いながらじじぬきを始めた。

「言っとくけど負けたら罰ゲームだからね？」

「上等だ。何にする？罰ゲーム」

龍牙はニヤリとして魅音に言った。

「鞆持ちなんてどう？」

「なんだそれ？」

龍牙は拍子抜けだなとばかりに言った。

「ならメイド服を着て荷物持ちは？」

「乗ったぜ!!」

その瞬間部活のメンバーがニヤリとした。

何故だか分からないが嫌な予感がした。

「言い忘れてたけどみんなトランプの裏についた傷で何がどのカードか分かるから気をつけてね？」

魅音はニヤリとしたまま龍牙に言った。

そして自分でハードルを高くしたことを後悔した。

「逃げませんわよね龍牙さん？」

「上等だ。やってやろうじゃねえか!!」

――一十分後――

「また…負けた」

龍牙が高らかに宣言してから六回じじぬきをやった。

だがその全てが龍牙の敗北になっていた。

「ぐわゝもう一回だあ!!」

そして七回目のじじぬきが始まった。

しかしトランプのカードが相手には分かり自分には分からないのは

かなりのハンデがあった。

「ふっふっふ。これはハートのJだな!!」

魅音が龍牙のカードを引いた。

そのとき龍牙はニヤリとした。

「残念だったな魅音!!」

「なっ!?! 龍牙まさか!?!」

「ふっ何回もやられてるわけにはいかねえんだ!!」

龍牙はカードに細工して偽装したのだ。

龍牙は沙都子のカードを引くために沙都子のカードを見つめた。

「右から8、Q、7、3だな?」

「なんでわかりますの!?!」

「さすがに六回もやれば学習するぜ。そこでこれで上がりだ!!」

龍牙は右から二番目のカードを引いた。

そして読み通りQだった。

「あっがり!!」

その後の三回も連続で龍牙が買ったが四勝六敗で罰ゲームは龍牙に決まった。

「さあて罰ゲームの時間だよん♪」

魅音はどこからかメイド服を取り出してきていた。

「仕方ねえ。ちょっと待ってろ」

龍牙は魅音からメイド服を受け取り着替えた。

そしてみんなの前に出て行った。

とりあえず髪型はポニーテールにしていた。

「いやゝ似合うなあ」

「女の子みたいですわ…」

「可愛いのですよ。にぱー☆」

「あんまりうれしくないんだが…」

部活メンバーからの評価はどうやら可愛いとの事だった。

するといきなりレナが叫んだ。

「かぁいいいよぉおもちかえりいゝ!!!!」

レナが龍牙を抱えて走り出した。

後から聞いたのだがこれがレナの「かぁいいいモード」らしい。

転校一日目はこんな感じで大変だった。

転校初日（後書き）

感想待ってます♪

鬼隠し編 1 (前書き)

鬼隠し編 スタート…

鬼隠し編 1

元の時代に戻ることも剣を見つけることも出来ないまま数ヶ月が過ぎた。

今ではすっかり雛見沢の住人になっていた。

そして一ヶ月前にまた転校生がやってきた。

転校生の名は「前原圭一」と言う少年だった。

ごく普通の男子中学生だった。

そして今日の朝は龍牙と魅音は一緒に圭一とレナが来るのを待っていた。

「今日も平和だね」

「年寄りかお前は？」

龍牙は伸びをしている魅音に言った。

いつもは魅音の事を龍牙が待つのだか珍しく早く来ていたのだ。

「レナ達遅えな」

龍牙はあくびをかみ殺しながら魅音に言った。

「そろそろ来るんじゃない？ ほら来たよ」

魅音が指差した方には圭一とレナが仲良く歩いてきた。

そして龍牙と魅音と合流した。

「朝からラブラブだな。圭一、レナ」

「なっ！？別にいいだろ！！」

圭一は顔を赤くしながら龍牙に言った。

隣でもレナが顔を赤くしていた。

「別にいいよ？俺には魅音がいるからな」

龍牙は魅音の肩に手を回しながら言った。

魅音の顔が赤くなっていたが龍牙は全く気付いていなかった。

「いいから早く行くぞ」

圭一は話を無理やり切り上げて分校に向かった。

レナも圭一についていき龍牙は魅音の肩から手を離れた。

そのとき魅音が何故か残念な顔をしていたが気にしないことにした。

――学校にて――

分校に到着して早速授業が始まった。

この分校は学年もバラバラで先生が一人しかいないので龍牙や圭一が代わりに教えることがたびたびあるのだ。

学園都市でもかなりの成績を誇る龍牙にとってこの時代の勉強は朝飯前だった。

「ここは…こうだ。分かったか？」

龍牙は沙都子と梨花に算数を教えていた。

「ほんと龍牙さんの説明はわかりやすいですわ」

「ほんとほんとなのです。にぱ☆」

年下に褒められても複雑な気分だったが気にしないことにした。

すると魅音とレナに数学を教えていた圭一が叫んでいた。

「うがぁ違う魅音！！そこは何回も教えただろうが！！」

「分かんないよう！！」

なにやら圭一と魅音がもめていた。

魅音は圭一よりも年上のはずだったが何故か圭一に教わっていた。

その横でレナはオドオドしていた。

「相変わらずですわね。圭一さんと魅音さんは」

「全くだ…」

龍牙と沙都子は二人してため息をついていた。

「僕達も頑張るのですよ。にぱ☆」

「梨花ちゃんはほんといい子だな」

龍牙が梨花の笑顔に癒されていた。

「龍牙さん。ここはどうするんですの？」

「ここは…」

その後も龍牙は沙都子と梨花に勉強を教えた。

その間に圭一は何回も叫んでいた。

そして圭一の叫びを何回も聞きながら授業が終了した。

「あゝ疲れた」

龍牙は椅子に腰をかけてだらんとしていた。

何だかんだ言って龍牙は人に何かを教えるのは得意ではないのだ。

「また教えてくださいね？」

「気が向いたらなあ…」

すでに龍牙はなにもするきが起きなかった。

すると梨花にちよいちよいと手招きされた。

（何だ？）

龍牙はけだるい体を動かして梨花についていった。

そして古手神社と言う神社まで連れて行かれた。

「どうしたんだ？梨花ちゃん？」

龍牙の問いに梨花は周りを見渡した後答えた。

「あなたは何者なの？」

梨花の口調がいつもの無邪気な口調でなく冷たく大人びた口調になっていた。

それに龍牙も知らず知らずのうちに警戒してしまっていた。

「何者ってどういう事だ？」

龍牙は極めていつもの口調で梨花に聞いた。

だがその目は真面目でさらに梨花から一定の距離を保っていた。

「あなたはどこから来たの？私の予想ではあなたは遠い未来から来たのでしょうか？」

龍牙は梨花が事実を射ていることに驚いていた。

「何でそう思うんだ？梨花ちゃん」

「あなたからは何か特別なものを感じるわ」

梨花は龍牙の目を見つめたまま言った。

龍牙は梨花にごまかしは利かないと思い全てを話すことにした。

「確かに俺はこの時代の人間じゃない。もっと未来から来たんだ」

龍牙の言葉に梨花が目を見開いた。

まるで信じられないとばかりに。

「それは本当！？」

「ああ本当だ。証拠もある。俺のいた時代では超能力が使える人がたくさんいたんだ」

そして龍牙は能力を解放して手のひらに炎の球を作り出した。

能力を解放している間は龍牙は金髪になり白眼の部分が黒くなると言うところある実験の副作用があった。

「私達にも未来があったんだ…」

梨花の言葉の意味を聞こうとすると誰かが階段をあがってきた。

龍牙はとっさに能力を封印して階段の方を見た。

「あら龍牙さんと梨花ではありませんの？」

「なんだ沙都子か…」

龍牙は安堵していた。

「なんだとは何ですか？」

「何でもないよ沙・都・子ちゃん」

龍牙がふざけながら沙都子をからかった。

そして帰ろうとして梨花に呼び止められた。

「今日は泊まっていたらいいですよ。にぱ☆」

さっきの大人びた口調を聞いた龍牙は今の梨花の口調に面食らっていた。

「そうですわよ。泊まっていたてくださいまし」

沙都子にも言われ龍牙は泊まっていくことにした。

鬼隠し編1（後書き）

感想待っています♪

鬼隠し編2（前書き）

惨劇の始まり…

鬼隠し編2

古手神社に梨花と沙都子と龍牙は泊まった。

すでに沙都子は寝て龍牙と梨花の二人っきりになっていた。

そして梨花から聞いた事は信じがたいことだった。

「嘘だろ…」

「信じられないだろうけどこれが現実よ」

梨花の話によると昭和58年6月より先の未来がやってこないのだ。

さらに梨花が殺されるとある期間から再び人生が始まるのだ。

しかもそれはまた違う人生なのだ。

そして梨花はそれを千年もの間繰り返して生きてきたという。

「でも何で俺に話してくれたんだ？」

龍牙は今まで感じていた疑問を梨花にぶつけた。

その事を龍牙に話しても何の特もないからだ。

「あなたはもしかしたらこの惨劇げんそうを終わらせてくれるかもしれないから」

「俺が？」

梨花はうんと一回頷いた。

そしてその瞳には希望がみなぎっていた。

「この世界は何回も体験している。そしてこの世界、いいえどの世界にもあなたは来なかった」

どうやらイレギュラーとしてこの世界にやってきた龍牙がこの惨劇げんそくを終わらせてくれると梨花は信じているようだ。

だが龍牙自身にそんな自覚はない。

「俺にそんな力があるか分からないが俺は元の時代に帰ることしか頭がない」

龍牙は窓から月を見上げながら言った。

それを聞いた梨花の顔には驚きと悲しみが宿っていた。

そんな梨花を見てただと付け足しをして梨花を見つめた。

「寄り道するのも悪くないよな」

それを聞いた梨花は安堵と同時に喜びに満ちた表情をした。

「でも具体的には何すればいいんだ？」

もったもな質問だったが梨花自身なにをすれば惨劇げんそくを回避できるか

分からないのだ。

「分からないなら仕方ない。これから見つけるしかないだろう？」

「でも…」

龍牙は梨花の唇に指を添えて言った。

「だったらお前が殺されないように俺が守ってやるよ」

「…信じてみるわその言葉」

「ああ信じろ」

龍牙は梨花の唇から指を離した。

そのときの梨花の表情はまるで天使のような笑顔だった。

「いい顔するじゃん。そっちの方がお前らしいよ」

「…ありがとう」

珍しく顔を赤くして龍牙にお礼を言った。

「明日は休みだからなゆっくり寝れるぜ…」

「みい、お休みなのです」

梨花がいつもの口調で龍牙に言った。

「なんか、変な感じする」

「ふふっそう？」

梨花は大人びた口調で言う。と布団に潜り眠ってしまった。

龍牙も布団に入り目をつむった。

するとすぐに眠ることが出来た。

――一次の日――

ぐっすりと布団に潜り寝ていた龍牙の腹にもの凄い衝撃がきた。

いやもしかしたら大したことがなかったのかもしれないが完全に油断していただけにダメージが大きかったのかもしれない。

痛みに耐えながら目を開けると腹の上に梨花が乗っていた。

「おはようなのです。にぱ☆」

「…お前は俺に何の恨みがあるんだ？」

龍牙は笑って誤魔化そうとする梨花に問いかけた。

すると龍牙の耳元で囁いた。

「恨みなんか無いわ。むしろ期待しているわ」

「だったら降りろおお!!」

龍牙は叫び梨花が乗っている龍牙の腹の上の掛け布団を思いっきり引剥がした。

梨花は転がって龍牙の足元まで行った。

するとどこから沙都子の声が聞こえてきた。

「梨花、龍牙さん早くしてくださいまし」

何のことか分からないが龍牙の事を待っているようだった。

「何するんだ？」

「今から龍牙に古手神社を案内するのですよ」

なるほどなと頷き龍牙はさっさと着替えを済ませて沙都子のところに向かった。

龍牙の服は白い無地のVネックに黒のGパンと言う格好だった。

あまり服にこだわりがないため適当に着たものだった。

そして玄関に向かうと待ちくたびれたとばかりに沙都子が座っていた。

「待たせたな沙都子」

「ほんと待ちましたわ!!」

両手を腰に当てて怒っていたようだが龍牙にはそうは見えなかった。

「落ち着くのですよ沙都子。にぱ☆」

「まあ梨花がそう言うのなら…」

梨花の笑顔はすごいなと改めて痛感させられた龍牙だった。

そして梨花と沙都子に古手神社を案内してもらっているとビニールシートを広げてご飯を食べている圭一とレナと魅音を見つけた。

「こんにちわなのです」

梨花が圭一達に話しかけた。

「おっ来た来た」

待ってたとばかりに魅音が言った。

「旨そうなもん食ってんじゃない？」

龍牙が広げてある大量の弁当を見ながら言った。

「レナが作ったんだよ？龍牙くんも食べる？」

「いただきます!!」

龍牙はビニールシートの空いているところに座った。

なにやら圭一と沙都子がもめていたが無視してレナの弁当をいただくことにした。

「う…うまあい！！うまいぞレナ！！」

「ありがとう、レナ嬉しいよ」

龍牙はレナの料理のうまさに感動しながら食べ続けた。

「ところで何で龍牙がここにいたの？」

「ん？ああここに泊まってたんだよ」

龍牙は包み隠すことなく魅音に言った。

そしてみんなで弁当を食べ終えた後会話をした。

レナと魅音は圭一に雛見沢を案内していたようで会話をした後帰ってしまった。

「さあて俺は…寝るか…」

この日はまったりとして終わった。

――二次の日の放課後――

部活メンバーと圭一が机を合わせて話していた。

「前原圭一を我が部のメンバーに加えたいのだがどうだろう？」

魅音がいきなり叫び始めた。

「レナは意義なくし」

「僕と沙都子も賛成なのですよ」

「俺も賛成だ」

みんなの意見を聞いて魅音が親指を立てながら再び叫んだ。

「おめでとう前原圭一くん！！君は我が部の正式な部員として任命された！！！」

「ちょっと待て！！部活って何をやる部なんだ！？」

圭一がもつともな事を叫んだ。

それに答えた魅音だったが長ったらしかったので龍牙が代わりに答えた。

「ようするに遊びの部だ」

「そうなのですよ」

「二人の説明でやっとわかったよ」

圭一が何やら疲れた様子で言った。

そして魅音がトランプを取り出した。

「よしじゃあ早速じじぬきをやろうか？」

魅音がトランプをシャッフルしてみんなに配った。

「随分と古いカードだな？まさかカードについての傷で何のカードか分かるのか？」

圭一は冗談半分で言ったのだろうがまさしくそうだった。

龍牙もこのゲームの被害者だったのだ。

そしてみんなはニヤリとした。

「……嘘だろ？」

「残念だが本当だ。それに罰ゲームありだ」

龍牙の言葉を聞き不公平だ！！と叫んだがすでにゲームは始まってしまっていた。

案の定圭一は九回中全て敗北していた。

そしてそんな圭一を見かねて龍牙がアドバイスをした。

「何をしてても無駄だよ、圭ちゃん！！」

魅音が圭一の息の根を止めるべくカードを引いた。

だが引いた魅音の顔は驚きに満ちていた。

「どうした魅音？カードでも間違えたか？」

龍牙がニヤニヤしながら魅音に言った。

「やってくれるね龍牙、まさかカードを偽装させるなんてね」

「どうだ魅音！！これが男の友情だぁ！！」

圭一がビシッと魅音を指差して言ったが結局罰ゲームをやることになったのだった。

鬼隠し編2（後書き）

感想待ってます♪

鬼隠し編3（前書き）

基本的に龍牙と梨花が中心にこの物語が進みます！

さらにこの話で梨花と羽入のキャラが崩壊しているかもしれませんが…

では惨劇の始まりです…

鬼隠し編3

圭一が部活のメンバーに加わった次の日の放課後。

今日もみんなが集まっていた。

そして魅音から綿流しと言うお祭りの事を聞いた。

この祭りは使い古した布団などの綿を川に流すと言う行事らしかった。

しかも梨花はその祭りの実行委員らしい。

「なんか退屈そうな祭りだな？」

「確かに。でも梨花ちゃんの巫女姿は見てみたいな」

圭一の言葉に龍牙も同意した。

雛見沢に今年から来た二人は綿流しについて知らないためそんな事を言っていた。

龍牙に至ってはこの時代にとばされたため知っているはずがないのだ。

「退屈どころか：今年もやるぜ綿流し会四教格闘！！」

龍牙と圭一は四人がそう叫んだことにびっくりしていた。

「今年は龍牙と圭一が来たから六強爆闘なりますですう」

梨花の話によると綿流し会に出ている出店を周り部活をやるということだった。

しかし龍牙は綿流しと聞いたとき何かを感じた。

とても悪い何かを感じたのだ。

そして部室を終えて龍牙は梨花と沙都子と一緒に帰っていた。

「龍牙、今日も泊まっていくとよいのですよ？」

「そうですわ。」

二人の言葉を聞き龍牙は今日は梨花と沙都子の家に泊まることにした。

それに梨花には聞きたいことがあったのでちょうどよかった。

「じゃあ今日は俺が夕飯作ってやるよ」

「楽しみなのです。にぱ☆」

梨花の家についた龍牙は早速夕飯を作り始めた。

元のいた時代でも料理はやっていたのでいがいと料理の腕には自信があった。

「梨花ちゃん、何がいい？」

龍牙が梨花に言う周囲を確認していた。

おそらく沙都子がないことを確認していたのだろう。

そして梨花は大人びた口調で言った。

「私の事は呼び捨てにしてちょうだい？」

「別にいいけど、何で？」

すると梨花の顔が少し赤くなっていた。

龍牙は一旦料理するのを止めて梨花に近づいた。

そして龍牙は梨花の額と自分の額をくつつけた。

「顔赤いけど熱はないみたいだな」

「∴それは無自覚でやってるの？」

梨花の言っていることがいまいち理解できなかった龍牙だった。

すると鈍感と呟いて梨花が居間に戻っていつてしまった。

（どうしたんだ？）

いまいち乙女心を理解できなかった龍牙であった。

そして三人分の料理を作った龍牙は居間に料理を運んだ。

龍牙は相変わらずチャーハンを作っていた。

どうやら龍牙の得意料理はチャーハンのようにだった。

「いただきますなのです☆」

「いただきますですわ」

二人の口調を改めて聞いた龍牙は改めて変わっているなあと思いがらじぶんも食べ始めた。

自分で言うのもあれだがかなりうまいと龍牙は思っていた。

「うまいか？」

「おいしいなのです。沙都子の料理よりおいしいのです」

沙都子もそれを理解しているのか悔しそうに龍牙の料理を食べていた。

そんな沙都子の様子に龍牙は苦笑しながら自分も食べ進めた。

そして二人は食べ終わると風呂に入ると言って風呂に向かっていった。

その間に龍牙は洗い物を済ましていた。

さらに暇だったので梨花と沙都子の布団を敷いておいた。

そして誰もいないはずの空間に話しかけた。

「出てこいよ羽入」

すると龍牙の後ろから梨花にどことなく似ている少女が現れた。

しかしその少女は龍牙と梨花にしか見えないのだ。

「僕が見えるのですか!？」

「ああ見れるし触れるぜ」

そう言って龍牙は羽入の頭に手を置いて撫でた。

羽入の存在は何故かこの時代にとばされたときから知っていたのだ。

そして羽入が今のように梨花と話せるようになるまでかなりの時間がかかったことを知っている。

梨花に存在が認識されるまで孤独な日々を送っていた事を知っていたのだ。

「嬉しいのです…今まで梨花としか…」

そう言って泣き崩れる羽入を龍牙は抱きしめた。

「大丈夫。今だけは俺に甘えていいんだ」

羽入は龍牙の言葉を聞き顔が真っ赤になっていた。

そして龍牙に抱かれながら安らぎに満ちて眠りについた。

（全く…かわいい寝顔だな…）

羽入を膝の上に寝かせながら言った。

そして梨花達が風呂にあがってくるまで羽入は龍牙の膝で眠り続けていた。

「龍牙、あがったのですよ？」

梨花がかわいいパジャマを着て龍牙に言いに来た。

そして羽入が龍牙の膝の上に寝ているのを見て梨花の視線が鋭くなった。

羽入も梨花の殺気混じりの視線に気づいたのか目を覚ました。

（羽入、覚悟は出来てるわね？）

（あうあうあう！？ごめんなさいなのです梨花）

龍牙は二人の光景に耐えられなくなり風呂に向かっていった。

そして龍牙が最後に見たのは梨花がキムチを一気に食べた瞬間羽入の顔が真っ青になったところだった。

（頑張って耐えてくれ）

龍牙はそんな羽入を応援して風呂に入った。

元の時間にいた頃から龍牙は長風呂だったのでつい長風呂してしまった。

風呂を上がり時間を確認すると既に十時を回っていた。

そして居間に行くと沙都子は既に寝ていた。

梨花は夜のそよ風を浴びながらワインを片手に月を見上げていた。

その姿は様になっていた。

ワインが似合う小学生はどうしたもんかなとおもいながら梨花の近くに座った。

「随分と素敵じゃないか梨花」

「ふふっありがとう」

今の梨花の口調は素の梨花の口調だった。

なにげにこの口調の梨花を無意識に気にしている龍牙だった。

「聞きたいことがあるの」

「何だ？」

梨花が聞きたいことがあるなんて珍しいなと思いながら聞いた。

「あなたは私と羽入どっちを選ぶ気なの？」

「……………は？」

龍牙は梨花のいきなりの質問に目を点にしてしまった。

そしてそんな龍牙の横でなにやら羽入があうあう言いながら焦っていた。

「選ぶって？」

「だから龍牙は私と羽入どっちと恋人になるつもりなの！？」

梨花は顔を真っ赤にして叫んでいた。

さらに羽入に至っては顔を手で覆ってあうあう言いながらうずくまっていた。

そこで龍牙はとある事に気づいた。

梨花の手には飲みかけのワインと半分ほどしか残っていないワインの瓶。

さらに顔の赤みは変わっていないが目がとろんとしていた。

「おまえ酔ってるな！？」

そして龍牙はその結果にたどり着いた。

だが羽入は酔ってはいないようだった。

そして梨花がいきなり龍牙の頬に手を当てて顔を近づけてきた。

今の梨花からはワインの匂いと髪の良い匂いが混ざり合った匂いがしてきた。

「どうしもん！？」

どうしたと聞こうとして龍牙の口がふさがれた。

梨花が龍牙の唇に自分の唇をつけてきたのだ。

（やっぱり酔ってやがる…って！？）

龍牙がそんなことを思っていると龍牙の唇の割れ目から温かいものが入ってきた。

そして龍牙はとっさに梨花を引き剥がした。

「どう？大人のキスは？」

梨花は小悪魔のような笑みを浮かべながら言った。

すでに確実に酔っていた。

しかも今の梨花は大人っぽい口調に色っぽい感じがするためなんとも負けた感じがした。

すると梨花がこちらに体重を預けてきた。

どうやら眠ってしまったらしい。

さらに羽入が梨花をうらやましそうに見ていた。

「おまえもする？キス？」

龍牙が冗談半分で羽入に言ったとたん羽入の顔から湯気が出ると思
うほど赤くなっていた。

するとコクンと羽入は頷いた。

「えっ！？冗dんん！？」

再び龍牙の唇はふさがれてしまった。

梨花のように酔っているわけではなかったのでそれだけで終わった。

「おまえ等大胆だな…」

「あうあうでも…」

「今回は特別だからな」

我ながらうざい発言だなと思いつつながら再び羽入とキスした。

そして龍牙は梨花を布団に寝かせて自分も眠りについた。

鬼隠し編3（後書き）

感想待っています♪

鬼隠し編4

龍牙と圭一が綿流しの祭りを知ってから数日経った。

遂に綿流しの祭りの日がやってきた。

しかしその間龍牙はずっと梨花と沙都子の家に泊まりっぱなしだった。

そして今は古手神社にいた。

梨花は綿流しで実行委員をするため巫女姿に着替えていたのだ。

しかしすでに着替え終わり龍牙と梨花は二人っきりだった。

「この世界では圭一が仲間を信じられなくなってレナと魅音を撲殺するわ」

龍牙は梨花からこの世界で起こる惨劇について聞いていた。

龍牙は梨花を守るために自分に出来ることをやるつもりだった。

「てことは俺は圭一を止めればいいんだな？」

龍牙の問いに梨花は頷いた。

「やることも分かったしみんなのところ行くか？」

「そうね」

二人は古手神社から出て圭一達を探した。

今の古手神社には出店がたくさんでていてさらに人で賑わっていた。

しかし案外簡単に圭一達を見つけることが出来た。

「こんにちわなのですよ」

「ういゝっす」

龍牙と梨花は一緒にいたことを隠さずに堂々とみんなの前に出て行った。

何故ならレナと魅音は梨花の巫女姿に釘付けだったからだ。

「梨花ちゃんの巫女姿かぁいいよぉお持ち変えりい」

レナはかぁいいモード全開だった。

「じゃあ早速行こうかぁ!!」

「「「おお」」」

魅音のかけ声と共にみんなは部活を始めた。

部活の内容は屋台の食べ物のお食い競争だった。

最初に向かったのはたこ焼き屋だった。

そこのたこ焼き屋のたこ焼きは一段と熱かった。

（畜生、熱すぎだ…ってええ！？）

龍牙はあり得ない光景を目にしまった。

圭一を除く部活メンバーが熱々のたこ焼きをものすごい速さで食べていたのだ。

「（熱くないのか？）」

「（実はこれは熱くないのをもらったのですよ。龍牙と圭一に罰ゲームをやらせるためにね）」

龍牙は途中から黒梨花になった梨花を見て恐怖を抱いた。

そして部活メンバーの執念の強さを改めて痛感した。

しかし次に向かったかき氷屋ではそのような事は出来ないと思い挽回しようとした。

だが考えが甘かったことを痛感した。

（かき氷って冷たいから関係ねえじゃねえか！？）

龍牙は早食いしてしまったため頭がいたくなっていた。

しかしそれは皆さん同じようだった。

（頭がいたいのですう…）

梨花と味覚まで共有している羽入が頭を抑えてうなっていた。

それは梨花と龍牙にしか見えないしさらに龍牙しか触ることが出来ないため誰にも迷惑になることはなかった。

次は綿飴屋に向かった。

ここでは何事もなく普通に食べていた。

そして次は射的屋に向かった。

「よし、梨花なんか欲しいのあるか？」

龍牙は鉄砲に玉を詰めながら梨花に聞いた。

「僕はあのくまさんのぬいぐるみがいいのですよ」

梨花が指差した方にはくまのぬいぐるみがあった。

しかし大きかったためにとるのは困難そうだった。

「任せろ!!」

龍牙はそう言って鉄砲を撃った。

龍牙が撃った玉は的確にくまのぬいぐるみの頭を捉えた。

しかしはじき返されてしまった。

「龍牙、悪いが先に貰うぜ!!」

「な、何!？」

圭一もレナのためにくまのぬいぐるみを狙ったようだ。

しかし結果は龍牙と同じだった。

「なかなかやるな…」

「圭一、悪いがこれだけは譲れねえ!!」

龍牙はそう言って鉄砲を撃った。

しかし再び弾かれてしまう。

そして圭一も撃つが弾かれてしまう。

二人はこれを繰り返した。

そして遂に59発目で結果が決まった。

龍牙がくまのぬいぐるみをゲットしたのだ。

「っしやあ!!見たか圭一!!これが俺の実力だぜ!!」

くまのぬいぐるみをとれないで落ち込んでいる圭一に言い放った。

圭一はレナに頭を撫でられて慰められていた。

「ほら、梨花」

「ありがとうございます。龍牙、ちょっとしゃがんでほしいのです」

龍牙は不思議がりながらも梨花の行ったとおりしゃがんだ。

すると梨花の顔が近づき龍牙の頬に梨花の唇が触れた。

「お礼なのですよ？にぱ☆」

その瞬間龍牙の顔が沸騰したように顔が真っ赤になった。

「おっ照れてるのかい？」

「照れてる龍牙くんかぁいいよぉおもちかえりい」

「う、うるせえな、次行くぞ！！！」

龍牙は照れ隠しのためにぶっきらぼうな口調でみんなに言った。

そして遂に夜になり綿流しが始まった。

梨花は実行委員のため演舞をやっていた。

演舞が終わり龍牙は梨花のところに行った。

「演舞よかったぜ？」

「ありがとう。それより圭一は？」

梨花に言われて圭一がいないことに気がついた。

「トイレじゃねえか？」

「……そう」

梨花の顔が何故か不安に包まれたが龍牙は何も話しかけることが出来なかった。

――一次の日――

綿流しが終わり龍牙達は分校に来ていた。

相変わらず龍牙は梨花と沙都子に勉強を教えていた。

しかし龍牙は圭一の顔が何故か曇っていたように見えた。

そしてあつという間に時間が過ぎて部活の時間になった。

「ふふっ、謎は全て解けた。犯人は梨花ちゃん、凶器は毒物、犯行現場は医務室！！」

今回の部活は三枚の紙に書かれた『犯人』、『凶器』、『犯行現場』の裏に書かれている事を当てると言うものだった。

これは推理力と相手の性格を理解することが重要だった。

「おっ、俺も当たりだ」

「ぐわあ」

「外しましたわぁ」

魅音と龍牙は正解したが沙都子と圭一ははずしてしまった。

梨花曰わく毒物でじわじわといたぶるのが好きらしい。

（ドSじゃねえか…）

龍牙は心の中で梨花に突っ込みを入れていた。

「次だ！！でもその前にトイレっ」と

圭一がトイレに行くために教室から出ていった。

しかしいつまで経っても圭一が帰ってこなかったため解散になった。

そしてこの時龍牙は物言えぬ胸騒ぎを感じていた。

鬼隠し編5（前書き）

なんだかグダグダになりました…

ではどうぞ…

鬼隠し編5

次の日、雛見沢に雨が降り注いだ。

しかしそれでも部活メンバーのやることは変わらなかった。

「いっけね今日おじさんの店の手伝いって事忘れてた！！！」

魅音が立ち上がりながら叫んでいた。

「ごめんみんな今日は部活なし」

「おじさんの手伝い？柄にもなく孝行な奴だな」

「おい圭一それは失礼だぞ？」

そんな会話に魅音が苦笑いをしていた。

「じゃあみんなごめんね。これで帰るわ」

「おう、またな魅音」

龍牙は帰る魅音に片手を上げて言った。

「それでは今日は解散ですわね」

「じゃあみなさんさよならです」

「じゃあな圭一、レナ」

そう言って龍牙は梨花と沙都子と一緒に教室を出た。

「お前ら傘持ってきた？」

「そう言えばありませんわ!？」

「大丈夫なのです。龍牙が入れてくれるのです」

梨花と沙都子は龍牙の傘を見ながら言っていた。

「だめだぞ。三人も入れないからな」

「だったら龍牙が走って帰ればいいのですよ？」

「そうですね」

「おい…ふ・ぎ・け・ん・な!!!」

龍牙は梨花と沙都子に顔をずっと近づけながら言った。

「なら僕達が濡れてすけすけになってもいいのですか？」

「そ、それは…」

龍牙は梨花と沙都子がすけすけになったところを想像してしまった。

すると顔がボツと赤くなってしまった。

「いやらしいのです龍牙!!」

「す、すまん…てえか雨やんでるじゃん」

会話をしながら玄関まで来て雨がやんでることに気づいた。

「これなら傘はいらないな」

「そうなのです」

そんな会話をして龍牙達は家に帰った。

次の日圭一が風邪で休んだ。

「圭一は風邪か？バカは風邪を引かないってのは案外当たらないな」

「そんな事言ったら圭一君がかわいそうだよ」

レナは龍牙に言い聞かせように言った。

「そうだな」

「ねえ龍牙。私達圭ちゃんのお見舞い行くんだけど一緒に行く？」

魅音が龍牙に聞いてきた。

龍牙は梨花の方をチラッと見てから答えた。

「俺はいいや。バカが移るからな」

「もう龍牙くんそんな事いっちゃだめだよ？」

レナが頬を膨らませながら龍牙に言ってきた。

「そうだったな。じゃあ今日も部活は中止か？」

「そういうことになるね？」

魅音が残念だとばかりに落胆しながら言った。

「まあ圭一がいないんなら仕方ないか」

「今日は解散。また明日ね」

そう言ってレナと魅音は帰って行った。

「帰るか、梨花、沙都子」

「そうですね」

「みい、残念なのです」

龍牙と梨花と沙都子はそのまま部活をすることなく家に帰った。

「梨花、沙都子。今日は俺自分の家で寝るわ」

「どうしたのですか」

「世話になりっぱなしだったからな」

「そんなことはありませんのに」

そう言って龍牙は自分の家に帰った。

龍牙が去るときの梨花の顔は寂しそうだったが龍牙は気付かなかった。

次の日龍牙は早め目覚めた。

「まだこんな時間かよ…」

龍牙は頭をわしゃわしゃと掻くと朝ご飯の支度にかかった。

適当に余っている材料でつくり腹に流し込んだ。

そして久しぶりの一人での登校をした。

（朝って誰もいないんだな…）

誰もいない通学路を歩きながらそんな事を考えていた。

少し歩いていると圭一が歩いているのを見つけた。

（あいつ今日は早いんだな）

龍牙は圭一のところまで行こうとしてギョツとした。

圭一の脇を通った白いワゴン車が圭一に向かって走り出したのだ。

「圭一危ねえ!!」

龍牙は叫びながら圭一に向かって走り出した。

圭一は龍牙の叫び声に気づき振り向いた。

「なっ!？」

圭一も自分に向かってワゴン車がつつこんできていることに気づいた。

そして脇の道に飛んでワゴン車から逃げた。

「大丈夫か圭一!？」

「あ、ああ大丈夫だ」

「あのやろオ圭一を殺すつもりだったのか？」

龍牙は何気なく出した言葉だったが圭一の表情は確かに変化していた。

そして圭一はすくっと立ち上がり歩きだしてしまった。

（なんかあったのか？）

そんな事を思いながら圭一と一緒に分校に向かった。

しかし二人には重い空気しかなかった。

そして圭一は分校に着くなりロッカーをあさり始めた。

「何やってんだ？」

「自分の身は自分で守るしかないんだよ」

圭一はあるロッカーから一本のバットを取り出しどこかへ向かっていった。

そして放課後になり部活の時間がやってきた。

「はいはいみんな集合!! 部活の時間だよーん!!」

「今日は何かな? かな?」

「久しぶりだからな。勝たせてもらうぜ!!」

と部活メンバーは張り切っていたが圭一は何故か荷物をまとめて帰ろうとしていた。

「あれ? 圭ちゃん帰っちゃうの?」

「気分が乗らないんだ。しばらくほっておいてくれないかな」

「圭くんもしかして女の子と一緒に遊ぶのなんて嫌だったかな? かな?」

レナが不安そうに圭一に聞いた。

しかし龍牙はそうではないと思った。

「そう言うわけじゃねえよ」

圭一はそう言うのと帰って行った。

「どうしたんだ圭一のやつ？」

「これじゃあ今日も部活は中止かな」

「残念ですわ…」

「でも圭一がいないんじゃないのですよ」

それもそうだなと部活メンバーは頷いた。

「私圭一くんの事心配だから先に行くね？」

「おうまた明日なレナ」

そう言ってレナな圭一を追いかけていった。

「さあて俺達も帰るか？」

「みい今日は僕達の家に来るのですか？」

「あれえ〜龍牙って梨花ちゃんの家止まってるのかな〜？」

魅音がニヤニヤしながら龍牙に言ってきた。

「だ、だったら何だよ！！」

「いや〜おじさんうらやましくてさ」

「だったらくればいいじゃねえか！！」

「あはは冗談だよ。みんなまた明日ね」

そう言って魅音も帰って行った。

そして龍牙達も帰って行った。

鬼隠し編5（後書き）

感想待っています♪

鬼隠し編 6 (前書き)

グダグダかもしれませんが…

ではどうぞ…

鬼隠し編 6

次の日龍牙はまた一人で登校した。

それは梨花と沙都子に起こしてもらうのが習慣になり寝坊してしまっただけだ。

龍牙は学校までの道のりを全力で駆け抜けている途中だった。

（さすがに遅刻はカッコ悪すぎる。それだけは回避しなければ！！）

そして龍牙はさらに走る速さを上げた。

そして分校に着く頃には汗だくになってしまっていた。

（鍛えておいてよかった。鍛えてなかったら確実に遅刻だった）

そんな事を思いながら分校の校門で息を整えていた。

すると魅音と圭一が何かを話していた。

お世辞でもいい雰囲気とは言えない感じだった。

（何があったんだ？）

そして二人はバラバラに分校に入っていた。

龍牙は圭一のところまで走っていった。

「どうしたんだ？圭一。何か重い雰囲気だったけど」

「何でもねえよ。ただ魅音にお前は仲間じゃないって言ったただけだ」

「なんだと？」

龍牙は耳を疑ってしまった。

「なあ龍牙は俺の仲間だよな！？」

「ふざけんなよてめえ：魅音が仲間じゃない？何があったか知らねえがそんな事言っって良いと思っってんのか？」

龍牙は怒りを剥き出しにして圭一に言った。

そんな龍牙の気迫に圧されて圭一は後退りした。

だが圭一は負けじと言い返した。

「だってあいつらは俺を除け者にした挙げ句俺を殺そうとしたんだぞ！！信じられるわけねえだろ！！」

圭一は腹の中にたまっていた感情を龍牙にぶつけた。

「そんな奴らを仲間とは思えねえんだよ！！あいつは差し入れの中に針なんか入れてたんだよ！！」

「確かに魅音も悪いかも知れない。だけどなんで疑うことしかしないんだ！！」

龍牙と圭一の言い争いは段々と激しくなっていた。

「魅音魅音って俺はどうなってもいいのかよ!!」

「そんな事言ってねえだろ!!」

龍牙と圭一はにらみ合ったまま言い争った。

「分かったよ…お前も仲間じゃない。お前も俺を殺そうとしてんだろ!？」

「なに言ってやがんだ!! そんな事やるわけねえだろうが!!」

「黙れ!!」

圭一は叫んで持っていたバットを龍牙に突きつけた。

だが龍牙は圭一から視線を離さない。

「俺は殺されない。俺は生き残ってみせる!!」

そう言って圭一は教室に向かった。

「ふざけやがって…」

龍牙はそう呟き圭一が見えなくなると再び歩き出した。

昼食の時間も部活メンバーから圭一は離れて食べていた。

そんな様子を龍牙以外の部活メンバーが心配していた。

「なあ魅音。差し入れに針入れたって本当か？」

「えっ！？針入ってたの！？」

「圭一がそう言ってた」

「そんな事魅ちゃんがやるはずないよ！！」

レナが魅音がやっていないと言うことを主張した。

「俺は魅音に聞いてるんだ。レナは黙っててくれ」

レナはそう言った龍牙の気迫に圧されて黙ってしまった。

「で、やったのか？やってないのか？」

「そんな事やるはずないでしょ！！」

魅音が言うと龍牙の表情はいつもの優しいものになった。

「よかった。けどなんで圭一はそんな事を言ったんだ？」

それに答えられる者は誰もいなかった。

そして放課後になり龍牙は再び一人で帰っていた。

みんなと仲良く帰る気分になれなかったのだ。

そしてとある道を通ったとき龍牙は圭一が複数の大人に追いかけられているのを見つけた。

（理由はしらねえが助けないわけにはいかねえ!!）

龍牙は圭一を助けるために走り出した。

だが龍牙が追いつく前に圭一の後ろにいた大人が圭一を気絶させた。

それと同時に龍牙が大人共に殴りかかった。

「俺のダチに手え出したことを後悔しやがれ!!」

そう言って龍牙は圭一の持っていたバットを振り回した。

すると大人共は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

そこにレナがやってきた。

「ど、どうしたのかな!? かな!?!」

「レナか!? ちょうどいい圭一を家まで運ぶから手伝ってくれ!!」

「う、うん分かった!!」

龍牙はレナと協力して圭一を家まで運んだ。

そして圭一を布団に寝かせた。

「レナ、魅音と医者に連絡してくれ」

「わ、分かったよ」

そう言うレナはあわてて電話し始めた。

電話し終わるとレナは龍牙の隣に座った。

「魅ちゃんすぐに来るって。あと監督も」

「監督？」

「うん。雛見沢ファイターズの監督さんで入江診療所の先生なの」

「雛見沢ファイターズって野球のチームか？」

「うんそうだよ？」

二人でそんなことを話していると圭一がいきなり起き上がった。

そしてぶたれたところを抑えた。

「横になってた方がいいと思うな」

「レナ！？龍牙！？」

「もうすぐ医者が来るから待ってろ」
するとインターホンがなった。

「魅音が来たみたいだな？」

「なんで魅音…」

「私が魅ちゃんを呼んだの」

そして圭一の部屋の戸が開いた。

「あゝれゝ？ 元気そうじゃん？ 心配して損したかな？」

そして魅音がレナの隣に座った。

「レナ、監督に連絡した？」

「すぐに来るってさ」

「誰だよ！？ 監督って！？」

龍牙は圭一が何かに怯えているように見えた。

「監督って言ったら監督だよ？」

「だから誰だよ！！ 監督って！！」

レナが答えているが圭一は何故か大声を上げて追求しようとした。

「まっ 監督が来る前に罰ゲームすませちゃおっか？」

「おはぎの宿題」

魅音がそう言うのとレナが圭一を羽交い締めにした。

「動かないでね罰ゲームだから」

そう言うとき魅音はマッキーペンを取り出した。

「何をする気なんだよ!!」

圭一はレナから逃げるために必死に抵抗している。

そして魅音が持っているマッキーペンをまるでこの世にないもののように見ている。

魅音はそんな事に気付かずマッキーペンで圭一の顔に落書きするた
めに近づこうとした。

「待て魅音」

龍牙が魅音の前に手を出して止めた。

「どうしたの龍牙？」

「ちょっとそれ貸してくれ」

「ん？別にいいけど？」

龍牙は魅音からマッキーペンを受け取った。

「圭一。これは何は何だ？」

龍牙はマッキーペンを圭一に見せた。

「何って注射器だろ!!それで俺を殺そうとしてんだろ!!!!」

「違うこれは注射器じゃないよく見ろ!!」

「注射器じゃ…ない？」

圭一は龍牙の言葉を聞いて改めてそれを見た。

すると圭一は暴れるのを止めた。

「マツキーペン？」

「そうだ。マツキーペンだ」

「あれ？なんでそれが注射器に見えたんだ？」

「それはお前が大石から聞いた話で仲間を信じられなくなってたからだ」

「そう…だったのか…」

圭一はレナに羽交い締めにされたままうつむいた。

「みんな悪かった」

「なんだか分からないけどおじさんは気にしてないよ？」

「レナもだよ」

「右に同じだ」

「みんなありがとう」

圭一はそう言って笑顔を見せた。

「それより罰ゲームだよん♪」

「えっ！？や、やめてくれえ！？」

圭一の抵抗もむなしくおもしろい顔になってしまった。

「「「ぷっはははははは」」」

三人は腹を抱えて笑い転げた。

「笑うなあ！！」

久しぶりに部活メンバーに笑顔が戻った。

すると監督がやってきた。

「おや前原さんじゃないですか？」

「あれ？あ那时的先生？」

「あれ圭一くん監督と知り合いなのかな？かな？」

「ちょっと医者に行った時な」

監督と圭一達が話をしているのを龍牙は楽しそうにみていた。

すると羽入が血相を変えて龍牙のところに来た。

（大変なのです梨花が梨花が！？）

龍牙は羽入の慌てている様子を見てただ事ではないと悟った。

鬼隠し編 6 (後書き)

次回で鬼隠し編を終わります…

感想待ってます♪

鬼隠し編終（前書き）

今回で鬼隠し編は終わりです…

ではどうぞ…

鬼隠し編終

圭一の雛見沢症候群による暴走を止めた龍牙は圭一の家の外にいた。
圭一の暴走を止めた後羽入が梨花が殺されそうと伝えに来てくれたのだ。

（能力を使って一気に行くぜ）

龍牙がフル演算モードに移行した。

髪が金髪になり白眼の部分が漆黒に染まった。

しかしフル演算モードに移行した龍牙の体に異変が起こった。

激しい頭痛と既視感に襲われさらにフル演算モードが十秒もしないうちに通常に戻ってしまった。

（畜生：どうなってやがんだ！？）

龍牙は未だに引かない頭痛を耐えながら仕方なく走り出した。

向かったのは古手神社の近くにある祭具殿だった。

そこに梨花をさらった山狗がいると言うことだった。

しかし能力も使えない龍牙と戦闘のエキスパートの連中と殺し合いをするのは無謀に近かった。

だが龍牙は諦めるわけにはいなかった。

（待ってろよ梨花）

龍牙はさらに走る速さを上げて祭具殿に向かった。

五分位してようやく祭具殿についた。

しかし周りには警備らしき人員がたくさんいた。

（どうやって突破する？）

龍牙が悩んでいるとあるものが目に入った。

古手神社の賽銭入れのところに身の丈ほどもある何かが置かれていた。

（まさか…）

龍牙が山狗に気付かれないようにそれに近づいた。

そしてそれを開けた。

中に入っていたのは龍牙がこの時代にきてなくしてしまった龍牙の愛剣だった。

（これを仕えてか？上等だ…やってやるぜ）

龍牙は久しぶりに剣を握り締め山狗の一人に突っ込みそして切り裂いた。

龍牙に斬られた山狗の一人は絶命した。

そこまで来てようやく他の山狗のメンバーも龍牙の存在に気づいた。

「誰だ貴様は!？」

「さあな!!」

龍牙は適当に答えて二人目を剣で切り裂き絶命させた。

その後龍牙は警備に当たっていた山狗を全て殺した。

龍牙の剣と服は血まみれになっていた。

「待ってろすぐにいく」

龍牙は祭具殿に近寄り中を確認した。

どうやら祭具殿の地下に他の山狗のメンバーがいるようだった。

龍牙は山狗のメンバーに気付かれないように祭具殿に入り地下に行くための階段を下りた。

地下に降りると八人の山狗のメンバーが台の上に寝かせた梨花の周りに集まっていた。

梨花は気を失っているようだった。

（あいつらは八人か…）

龍牙は突撃するのを躊躇っていた。

何故なら山狗のメンバーの腰には銃などがたくさん所持されていたからだ。

梨花を安全にかつ無傷で救い出すにはリスクが高かったのだ。

しかし龍牙は悩んでも仕方ないと思い剣を強く握り締めた。

（一気に殲滅する！！）

龍牙は山狗のメンバーが気付く前に一気に近づいた。

そしてまだかなりの距離があったが山狗のメンバーは龍牙に気づいた。

山狗のメンバーは迷うことなく銃を抜き放ち撃ってきた。

普通ならビビって走る速さを緩めてしまいが龍牙は違った。

さらに走る速さを上げて山狗に突っ込んだ。

そして目にも止まらない速さで山狗のメンバーを一人また一人と絶命させていった。

そして後一人と言うところで龍牙は失態を犯した。

山狗に背後をとられてしまったのだ。

避けることも出来るが避ければ確実に梨花を銃弾が貫いてしまう。

そして銃弾が放たれた。

そこで龍牙がとった行動は左手を犠牲にして山狗の最後の一人を絶命させることだった。

龍牙の剣は最後の山狗のメンバーの首を体から切り離した。

それと同時に龍牙の左手を銃弾が貫いた。

「ぐっ！？くっ…うっ、はぁはぁ…」

龍牙は最後の山狗のメンバーが放った銃弾の痛みに耐えながら周りを見渡した。

どうやらここにはもう山狗はいなくなっていたようだった。

そして龍牙は梨花を起こした。

「梨花？大丈夫か？」

「うっ…龍…牙？」

梨花は上半身だけを起こして龍牙を見た。

そのときは安堵したようだったが龍牙の左手と周りの惨劇を見て絶句していた。

「これはあなたがやったの？」

「……ああ。すまねえ」

二人にしばしの沈黙が漂った。

しかしそんな沈黙を壊すかのように山狗の無線から声が聞こえてきた。

それは増援を伝える連絡だった。

「梨花逃げるぞ」

「えっ…!？」

龍牙は剣を腰につけて梨花を右手に抱えて祭具殿の階段を駆け上がった。

そして祭具殿を飛び出し走り出した。

山狗のメンバーはどのくらいいるか分からないし仮にもこれで全員だとしても絶望的だった。

龍牙は左手は完全に使い物にならなくなりさらに梨花を守りながら戦うのは能力なしでは無謀だった。

「龍牙、圭一は？」

梨花は龍牙に抱えられながら聞いた。

「大丈夫。俺が止めた」

それを聞いた梨花は安堵のため息をついた。

それでも梨花が死んでしまったら意味がなかった。

そして龍牙は梨花を守るためなら誰にでも刃を振るうつもりだった。

すると龍牙が走ってきた方向から複数の足音が聞こえてきた。

「もう来やがったのか!？」

龍牙は舌打ちをしながら呟いた。

そして山狗のメンバーは龍牙に向かって発砲してきた。

応戦しようとするも左手は使えず右手には梨花を抱えているため剣を抜くことが出来なかった。

「龍牙、私を置いて行きなさい。それしかあなたが生きる方法は無いわ!!!」

梨花が龍牙の腕の中で叫んでいた。

しかし龍牙には梨花を見捨てるなんて言う選択肢は端からなかった。

「言ったら、俺がお前を守るって!!」

梨花にそう叫んだ龍牙だったが急に体勢を崩してしまい転んでしまった。

しかし梨花に怪我をさせないように龍牙は梨花の下になっていた。

「どうした…の…?」

梨花が龍牙に向き直りながら聞いた。

そこには右足を抑えながら痛みをこらえている龍牙がいた。

どうやら銃弾が右足を貫通したようだった。

そして龍牙がうずくまっている間に山狗が近付いてくる。

「梨花、お前は逃げろ。ここで俺が食い止める!!」

龍牙は剣を杖代わりにして立ち上がりながら梨花に言った。

「でも」

「いいから早く行け!!」

龍牙は梨花の言葉を遮るように怒鳴った。

そのとき梨花は肩をビクツとさせた。

「頼む」

龍牙が言ったがすでに間に合わなかった。

山狗のメンバーは二人に追いつき銃を構えていたのだ。

「俺の後ろに」

龍牙は梨花を自分の後ろに隠すように立った。

そして山狗のメンバーは一斉に銃を撃ってきた。

「なめるなよ…三下があああ!!」

龍牙は巨大な剣を振り回し全ての弾丸をはじき落とした。

そして痛むのを我慢して突っ込んだ。

龍牙は剣を振り回し山狗のメンバーを次々に絶命させていった。

しかし山狗のメンバーは斬っても斬っても増えていく一方だった。

そして遂には後ろからやってきた増援に挟み撃ちにされてしまった。

すでに龍牙は三十人ほどの山狗のメンバーを殺していた。

龍牙の体力と精神力共にすでに底をついていた。

「龍牙、もう良い早く逃げて!! あなたまで死んでしまうわ!!」

梨花が前にいる龍牙に向かって必死に叫んでいる。

しかし龍牙は全く動こうとしない。

「梨花を残して逃げられるかよ!!」

龍牙は剣を構えながら叫んだ。

その殺気すらこもった龍牙の叫びに山狗の動きが鈍った。

「そこをどけ!!」

龍牙は剣を振るい一気に道を切り開いた。

そしてそこから梨花を逃がした。

「逃がすな追え!!」

山狗のリーダーらしき男が叫ぶが龍牙そんな事を許すわけがなかった。

梨花を追いかけようとした山狗のメンバーを切り裂いた。

「坊や遊びは終わりよ?」

突如聞こえてきた女性の声に龍牙が振り向いた。

そこには殺されたはずの鷹野三四がいた。

鷹野の手には銃が握られておりそして引き金をひいた。

(まずい!?)

剣で防ごうとするもすでに手が動かない。

完全に死を覚悟した龍牙の脇から誰かに突き飛ばされる感じがした。

そして龍牙を突き飛ばしたのはにげたはずの梨花だった。

鷹野が放った弾丸は梨花の胸を貫いた。

そしてその貫いた場所から血が吹き出し龍牙の顔を濡らした。

弾丸を食らった梨花は糸が切れた糸人形のように地面に倒れた。

「梨…花……？」

龍牙はゆっくりと近づき血だらけの梨花を抱きかかえた。

「良か…った無…事み…たいで…」

梨花は自分の心配より龍牙の心配をしていたのだ。

「お、おい死ぬなよ？おい！！」

龍牙の叫びに反して梨花のまぶたは閉じていく。

「次の世…界で…も会え…ると…良いわ…ね」

「死ぬなよ梨花！！」

「笑って…龍牙……に…ぱ……」

最後に梨花は笑って瞳を閉じた。

「おい…梨花？起きろよ？梨花！？」

「どうしてこんな事に……」

そして龍牙はみんなを殺してしまったと言う罪悪感から雛見沢症候群に発症して首をかきむしり自害した。

それがこの世界の末路だった。

鬼隠し編終（後書き）

次回の構想は……まだ決まっておりません……

感想待ってます♪

神と悪魔（前書き）

今回はよく分かりません……

神と悪魔

あなたは何故ここにいますか？

愚問ダナ神ヨ。鬼共ヲ監視スルノガ我々悪魔ノ役目デアロウ。

何故あなたは他の時代からここに現れたのですか？

ソレハ単ナル偶然ニスギナイ。ダガココニ来タカラニハ役目ヲ果タスノガ我々ノ仕事ダ。

何故あなたは皆を殺したのですか？

ソレハ神ノ生マレ変ワリヲ殺カラダ。

では何故あなたは泣いているのですか？

我が泣イテイル？アリエナイ事ダ

ならその頬を触ってみればいいのです。

.....

どうなのですか？

コレハ我ノ流シタモノデハナイ。コレハ……

あなたの生まれ変わりの者の涙ですね？

ソウダ

では私にそのもの『虎王龍牙』に会わせてほしいのです。

ワカッタ

白い何もない空間に龍牙はいた。

「ここはどこだ？ 死んだのか？」

「はいあなたは死にました」

龍牙は聞き覚えのある声にゆっくり振り返った。

「羽入か……」

「あなたは悪魔の力で圭一達を殺しました」

「ああ分かってる」

「その罪は晴れることは決してありません」

「だろうな。それに次の世界に俺がいるかも分からない」

「そうなのです。でも僕の力で龍牙を再び世界に連れ戻します」

「そうか。なら今度こそ梨花の惨劇^{げんそう}を終わらせられるだろうか？」

「あなたとあなたの仲間とで運命を打ち破るのです」

「当たり前だ。そのときはお前も一緒に来るんだ」

「分かってます。一緒に戦うのです」

「なら行こう。惨劇^{げんそう}を終わらせるために最後の雛見沢に」

そう言った龍牙と羽入は再び惨劇^{げんそう}に立ち向かっていった。

神と悪魔（後書き）

感想待ってます♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8302/>

とある悪魔の絶対能力（パーフェクトスキル）～外伝～

2010年10月9日12時40分発行